

---

# MMO生活

11

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MMO生活

### 【ZPDF】

Z0900Y

### 【作者名】

11

### 【あらすじ】

仕事から帰宅し疲れ果てて眠りについた男は、何故か彼がプレイ中であるMMO、【アオフベーシン】の世界にトリップしてしまった！・・・普通トリップ世界にトリップパーじゃないキャラクターつていないよな？倒れたらまた町に戻れるってどういうシステムなの？俺はどうやつたら元の世界に還ることが！？

ゲームの世界でその世界がどのように動いてるか体験する。そんなお話を。

## 直前の会話（前書き）

超見切り発射です。続きを書くかもわかりませんが、田に留めていただき、ありがとうございます。

## 直前のお話

長いデスマーチに一段落付け、俺は何日かぶりの自室に足を踏み入れた。

スーツはくたびれ、髪はボサボサ、3日入っていない体は不愉快な臭いをはなち、頬はやつれ、目は充血して目の下には隈、髪も伸びっぱなしという、なんとも哀れな出で立ちの俺は、ベッドに倒れるように潜り込み、そのまま深い眠りについた。

（明日はまたと起きて風呂に入らねば・・・）

そんな事を思いながら・・・

ぼんやりと目を開くと、俺は自分のパソコンの前に座っていた。眠気で回らない頭でなんとなく「ああ、久しぶりに開いたなあ・・・」などと思いつつパスワードを打つ。

聞き慣れた起動音とともに、デスクトップ画面が表示され、俺は慣れた手つきでアイコンをクリックした。

システム読み込みのゲージがぐん、と進み、スタートボタンがクリック可能になる。

久しぶり過ぎて技の名前が余り思い出せない。クランの皆は元気にしているだろうか・・・

既にキャラクター選択画面だ。キャラクターは3体。中肉中背の人間（男）、金髪でやや長身のエルフ（女）いかにもな感じのドワーフ（男）

人間の男を選択し、ゲームを開始する。

版から「ツツツ」とプレイし続け、現在でもそれなりの高レベルなメインキャラ、久しぶりにレベル上げもしよづ、ああ、新しい生産スキルも出たつて言つてたつけ。

そう考える内に、ずっと一定量だった睡魔が急激に襲い、俺の視界はホワイトアウトしていった。

まどろみからゆっくりと意識が浮上する。

ぼんやりと目を覚ました俺は朝になつてゐることに気がつき、跳ねる  
よつと上体を起こし目覚ましがわりの携帯を探す。

やべえ！今何時だ！？

8時を過ぎていれば風呂に入れないし9時を過ぎていれば遅刻確定  
だ。一人暮らしで目覚まし音のしない目覚めは相当心臓に悪い。

飛び起きた一瞬でそんな事を考えた俺は、目に入る風景に目を凝つ  
た。

「ううは・・・ビニだ・・・？」

二リで買った心地よいスプリングの効いたベッドに、シンプルな  
がらに俺好みだったモントーンの布団カバー一式はそこにはなく、  
少し厚手だが目の荒い白いシーツで、ベッドのスプリングも全然効  
いていない。（確認したら藁みたいなのがドツサリ詰めてあつた）

壁は見慣れた白い壁紙はなく、手垢なんかで黒ずんだ、木の板で出来た良く言えばレトロな、ぶつちやけ小汚い壁。

そして床はフローリングは一緒だが、これまた酷く黒ずんでいる。

キャスター付きの椅子と、パソコン用のL字型テーブルは木製の円  
形テーブルと椅子に、クローゼットは無く、頑丈そうな箪笥と、乱  
雑に物が入った木箱、後はゲームぐらいでしかお目にかかつたこと

の無いような、宝箱のような箱がそれぞれ一つずつ隅の方に置いてあつた。

そんな周囲を見渡した俺は胃の辺りに急に重いものを詰められたような感覚を起こし、全身から汗が吹き出した。簡単に言うと、パニックを起こしたのだ。

なんだこのうらぶれた別荘みたいなところ！？ヤクザか何かに誘拐されたのか！？何故俺が！？

絶叫しそうな心を抑え、ヤクザ我現れた時にどうすれば生き残れるかを必死で考える。

飛び掛かるか！？だめだ！そんな事で勝てるはずが無い！そもそもビビって足が竦かもしれん。助けを求めるか！？いやそもそも何故俺が誘拐されたかを聞きたい！嫌だ死にたくない！…！

心臓が早鐘を打ち瞳孔は開いているのに目には何も写っていない様に頭に入つてこない。そんな状態で数時間、いや数分だったのかもしれない。徐々に俺は冷静さを取り戻し、再度周囲を確認した。

辺りはしんと静まり返り、人の動く気配はない。  
部屋ばかり見渡していたが、ベッドの横に窓があり、いつそりと外を覗く。

どうやらここは2階建てのようである。そこそこに高い木が窓の近くに一本、そして数十メートル離れたところから森のようになびかれていた。

もしもの時はこの木を伝つて降りよう。木登りなんて小学生以来だ

が2階へらいだし何とかなるだろ。

そう思いながら意を決した俺は足音をなるべく立てなことひしきそつとベッドから足を下ろした。

ベッドから降りた俺はまた慎重に、そろそろと足を運ぶ。煩いぐら  
いに脈打つ心臓。得体の知れない状況が恐ろしい。自然と呼吸が速  
まる。

時間をかけて着いた扉にそっと耳を宛て、こちらに近付く足音が無  
いことを確認し、音がならないようにゆっくりとドアノブを捻り少  
しだけ開く。

キイ・・・と音がなつてしまいどつと汗が出たが、またしばらく気  
配が無いのを確認し、そつと扉の隙間を除いた。

・・・

そこには人の気配はなく、これまた木で出来た廊下が少し続き、先  
に階段があつた。また慎重に扉を開き、首だけを出して左右を確認  
する。階段の反対側には道は無く、窓のある壁際に小さな机があり、  
花瓶に花が活けてあつた。

そこで俺はその花瓶にデジャヴュを感じ、眉をひそめた。

見たことが無いのに、無いはずなのにどこかでこの模様を見た気が  
する。

俺の家には花瓶なんて無いし、貰つたことも無い。家族も特に花を  
活けるような人はいなかつた。はず。

友人の家で？見たかもしれないが、違う気がする。第一こんな家に  
住む友人なんていない。そして友人なんてお互い忙しくて1年くら

い会つてない。

そこでふと、別な可能性に思い当たり今度はさあつと血の氣が引いた。

疲れて、どうやって帰ったかも明白に思い出せない。つまり、全くのあかの他人の家（別荘かもしれない）に侵入し、そのまま眠りのついてしまった可能性だ。

その場合、死ぬことはないが、社会的に死ぬ可能性がある。

ただ疲れて帰ったはずが、豚箱行きという可能性だ。

一応スーツは着ていいとはえ、連日の徹夜のせいで顔色は悪い上髭も伸びっぱなし。更にかなり臭いとなれば、ぶつちやけ家があるのか怪しい人の完成である。これはマズすぎる。

慌てて俺は部屋を抜けだし、ハツとしてまた慎重に隣に部屋があるのを見て、その部屋の扉に耳を宛てた。

しんと静まり返った部屋は、人の気配はないが、もしかしたら眠っているだけなのかもしれない。もし人がいたら・・・

俺は再度ゆっくりと、自分が盗人になつたよつた気分に苛まれながらもじつそりと階段を降りた。

## 2話目（後書き）

「こいつになつたら」こじがゲームの世界と繋りづくのか・・・

心理描写好きでつこ・・・

1階にも人の気配はなく、それでもこんな状況に陥ったことの無い俺は部屋の入口のある場所をキヨドキヨドと見ながら玄関と思しきドアに手をかけ開いた。

すんなりと扉は開き、草の生えた青々しい庭が見えた。すっと隙間に体を通すように外に出て、またゆっくりと閉め、俺は全力で庭を駆け抜け森の中に飛び込んだ。

道と思われる所の数メートル先に潜み、木にもたれ掛かりながらいやがみ込み、潜めていた息を一気に吐き出した。

「・・・っはあ！はあっ！」

死ぬかと思った！なんかもうこうんな意味でダメかと思つた！…よかつたああああああああ！…俺生きてる！ひひひひひう

俺は生きている事への喜びと抜け出したことへの達成感でハイになつた。ガチでフヒツ！…ブヒヒツ！…などと音を立てながら息を調える。

そしてヒュウヒュウ鳴つていた呼吸が落ち着いた所で深呼吸し直し自分の現状に気付いて愕然とした。

森の中の、別荘。

ここは一体、どこなんだ？

ここに来て何度もかのフリーズをしかけた所ではつと閃く。

そうだ！携帯！！！

そう思いポケットを確認しようと目を自身に向かた俺はまた驚くことになった。

ムツキムキ・・・！何だよこのガチムチボディ！！！

高校生で剣道を辞め、ろくすっぽ運動をしていなくてヒヨロヒヨロになつていた俺の体が見たことも無いほどムキムキだったのである。取り合えず自分の体が本物かペタペタと触つてみる。

まごう事なき筋肉で、更に俺の体である。キーボードばかり打つていた小綺麗な指はぶ厚い皮で守られた超こつつい指になつていて。そんな指で顔に触れ、輪郭を確かめてみる。

俺の顔は日本人特有の、彫りの浅い鼻も大して高くないそれは面長で鼻は高く彫りも深い、西洋人のようなそれになつていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0900y/>

---

MMO生活

2011年10月31日17時10分発行